

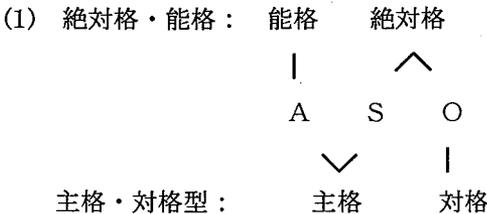
# アバール語の再帰代名詞について\*

山田 久 就

## 1 始めに

再帰代名詞の分布は、理論言語学の中心的なトピックの一つである。世界の諸言語の再帰代名詞は、ある共通性を保ちながらも、かなり違った分布を持っている。本稿の目的は、アバール語の再帰代名詞zhi-, zhi- -goの分布を記述するとともに理論的な観点から考察することである。アバール語の統語論は全般的にあまり研究が行われていないが、再帰代名詞に関してはほとんど研究がなされていない。

アバール語は、絶対格・能格型の格配列を持つ言語の一つである。本稿ではDixon (1979, 1994)の用語S、A、Oを用いるが、アバール語のような絶対格・能格型の格配列を持つ言語ではSとOが絶対格で、Aが能格で現われる<sup>1</sup>。一方、日本語のような主格・対格型の格配列を持つ言語では、SとAが主格で、Oが対格で現われる。S、A、Oと格配列の関係を簡単に図式化すると次のようになる。



アバール語の格配列を例示する。(2)は自動詞文で、SのMusaが絶対格で現われている。(3)は他動詞文で、AのRasulが能格で、OのMusaが絶対格で現われている。

- (2) Musa                      haniwe              wach'ana.  
 Musa・ABS                  ここに              来る・PST  
 「Musaがここに来た。」

- (3) Rasulitsa Musa haniwe wachana.  
 Rasul · ERG Musa · ABS ここに 連れて来る · PST  
 「RasulがMusaをここに連れて来た。」

再帰代名詞の分布を議論する上での一つのトピックに斜格経験者述語(oblique experiencer predicates)がある。アバール語の自動詞の中にも斜格経験者述語がいくつかある。-otl'ize (好く、欲する)などの述語では経験者(experiencer)が与格で現われ、-içize (見る、見える)、rařize (聞く、聞こえる)、řaze (知る)、-ich'ch'ize (わかる)、rak'alde kkeze (思う)、rixine (嫌う)、ch'alřine (飽きる)などの述語では経験者が位格Iで現われる。被経験者(experiencee)は常に絶対格で現われる。(4)は経験者が与格で現われている例であり、(5)は経験者が位格Iで現われている例である。

- (4) řalie Pat'imat jotl'ula.  
 Ali · DAT Patimat · ABS 好いている · PRS  
 「AliがPatimatを好いている。」

- (5) řalida Pat'imat jiçana.  
 Ali · LOC(I) Patimat · ABS 見る／見える · PST  
 「AliがPatimatを見た。／AliにPatimatが見えた。」

本稿の構成は、次の通りである。第2節で再帰代名詞zhi-の分布を、第3節で再帰代名詞zhi- goの分布を局所性(locality)、人称、統語的位置の観点から考察する。そして、第4節でまとめを行う。

## 2 zhi-

この節では、再帰代名詞zhi-について論じていく。

### 2.1

zhi-には、局所性に関して次の制約がある。

- (6) zhi-は同一の節にある名詞句を先行詞にできない。

(7)は、zhi-が同一の節にある名詞句を先行詞にされていて、容認されない文である。それに対して、(8)は、zhi-が異なる節にある名詞句を先行詞にされていて、容認される文である。

- (7) \*Musa<sub>i</sub>            zhindir<sub>i</sub>            wasasukx            balahana.  
 Musa · ABS    自分 · GEN    息子 · LOC(II)    見る · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子を見た。」

- (8) Musa<sub>i</sub>            zhinda<sub>i</sub>            k'a'alew            wasasukx            balahana.  
 Musa · ABS    自分 · LOC(I)    話す · AdjPt,PRS    男の子 · LOC(II)    見る · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>に話している男の子を見た。」

上の(8)では、zhi-を間接的に支配(dominate)している文によって直接的に支配されている名詞句がzhi-の先行詞になっているが、zhi-とその先行詞がこのような環境にない場合、文は容認されない。制約(6)をより厳密にすると、制約(9)のようになる<sup>3</sup>。

- (9) zhi-の先行詞はzhi-を間接的に支配している文によって直接的に支配されている名詞句でなくてはならない。

zhi-の先行詞には、人称に関して次のような制約がある。

- (10) zhi-は一人称、二人称の代名詞を先行詞にできない。

- (11) では、zhi-を用いることはできず、一人称の代名詞が用いられる。

- (11) Dun<sub>i</sub>            dida<sub>i</sub>/\*zhinda<sub>i</sub>            k'a'alew            wasasukx  
 私 · ABS    私/自分 · LOC(I)    話す · AdjPt,PRS    男の子 · LOC(II)  
 balahana.  
 見る · PST  
 「私<sub>i</sub>が私<sub>i</sub>/\*自分<sub>i</sub>に話している男の子を見た。」

## 2.2

zhi-の先行詞が現れることができる統語的位置に関しては次の制約があると思われる。

- (12) zhi-の先行詞はS (絶対格)、A (能格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) のいずれかでなくてはならない。

このことを例示していく。先に示した(8)と下の(13)、(14)は、自動詞文である。(8)では、S (絶対格) がzhi-の先行詞になっている。それに対して、(13)、(14)では、S (絶対格) 以外のアクタントがzhi-の先行詞になっている<sup>3</sup>。(7)は容認される文であるが、(13)、(14)は容認されない文である。

- (13) \*Musakxe<sub>i</sub>           zhinda<sub>i</sub>            ɬalarew  
 Musa · ALL(II)   自分 · LOC(I)   知る · AdjPt,PRS,NEG  
 chi               wach'ana.  
 人 · ABS   来る · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>の所に自分<sub>i</sub>が知らない人が来た。」

- (14) \*Musada<sub>i</sub>           ask'oj           zhiw<sub>i</sub>           rixaraj  
 Musa · LOC(I)   そばに           自分 · ABS   嫌う · AdjPt,PST  
 jas               ɬodoj ch'ana.  
 女の子 · ABS   座る · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>のそばに自分<sub>i</sub>を嫌っている女の子が座った。」

次の(15)-(19)は、全て他動詞文である。(15)では、A（能格）がzhi-の先行詞になっている。(16)、(17)では、O（絶対格）がzhi-の先行詞になっている。(18)、(19)では、A（能格）、O（絶対格）以外のアクタントがzhi-の先行詞になっている。(15)は容認される文であるが、(16)-(19)は容認されない文である。

- (15) Musatsa<sub>i</sub>           zhindie<sub>i</sub>           tɬ'ural           sualaze  
 Musa · ERG   自分 · DAT   与える · AdjPt,PST   質問 · PL,DAT  
 zhawab           tɬ'una.  
 答え · ABS   与える · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が<sup>s</sup>（誰かが<sup>s</sup>) 自分<sub>i</sub>に与えた質問に答えた。」

- (16) \*Ditsa   Musa<sub>i</sub>           zhiw<sub>i</sub>           hawurab  
 私 · ERG   Musa · ABS   自分 · ABS   生まれる · AdjPt,PST  
 bak'alde           wachana.  
 場所 · ALL(I)   連れて行く · PST  
 「\*私がMusa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>が生まれた場所に連れて行った。」

- (17) \*Musa<sub>i</sub>           zhintsai<sub>i</sub>           gukkaraw           wasas  
 Musa · ABS   自分 · ERG   だます · AdjPt,PST   男の子 · ERG  
 ch'wana.  
 殺す · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>がだました男の子が殺した。」

- (18) \*Musae<sub>i</sub>            zhinda<sub>i</sub>            ɪalarew  
 Musa · DAT    自分 · LOC(I)    知っている · AdjPt,PRS,NEG  
 chijas    ɟarats            tɪuna.  
 人 · ERG    お金 · ABS    与える · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>に自分<sub>i</sub>が知らない人がお金を与えた。」

- (19)\*Ditsa            Musadasa<sub>i</sub>            zhintsa<sub>i</sub>            kxwarab  
 私 · ERG    Musa · ABL(I)    自分 · ERG    書く · AdjPt,PST  
 kayat            baxchana.  
 手紙 · ABS    隠す · PST  
 「私はMusa<sub>i</sub>から自分<sub>i</sub>が書いた手紙を隠した。」

下の(20)、(21)は、与格経験者述語文である。(20)では、経験者(与格)がzhi-の先行詞になっている。(21)では、被経験者(絶対格)がzhi-の先行詞になっている。(20)は容認される文であるが、(21)は容認されない文である。

- (20)Musae<sub>i</sub>            zhinda<sub>i</sub>            k'aɪalew            was  
 Musa · DAT    自分 · LOC(I)    話す · AdjPt,PRS    男の子 · ABS  
 wotɪ'ularo.  
 好いている · PRS,NEG  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>に話している男の子を好いていない。」

- (21)\*Musa<sub>i</sub>            zhinda<sub>i</sub>            ɪalarej  
 Musa · ABS    自分 · LOC(I)    知っている · AdjPt,PRS,NEG  
 jasaɛ            wotɪ'ula.  
 女の子 · DAT    好いている · PRS  
 「\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>が知らない女の子が好いている。」

下の(22)、(23)は、位格I経験者述語文である。(22)では、経験者(位格I)がzhi-の先行詞になっている。(23)では、被経験者(絶対格)がzhi-の先行詞になっている。(22)は容認される文であるが、(23)は容認されない文である。

- (22) Musada<sub>i</sub>            zhinda<sub>i</sub>            aburab            zho  
 Musa · LOC(I)    自分 · LOC(I)    言う · AdjPt,PST    こと · ABS  
 raɟularo.  
 聞こえる · PRS,NEG

「Musa<sub>i</sub>に（誰かが）自分<sub>i</sub>に言ったことが聞こえない。」

- (23)\*Musa<sub>i</sub>           zhindie<sub>i</sub>       jotl'ulej  
 Musa<sub>i</sub>・ABS   自分<sub>i</sub>・DAT   好いている・AdjPt,PRS  
 jasalda            ialaro.  
 女の子・LOC(I)   知っている・PRS,NEG  
 「\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>が好いている女の子が知らない。」

以上、zhi-には(12)=(24)の制約があることを例示した。

- (24) zhi-の先行詞はS（絶対格）、A（能格）、斜格経験者述語の経験者（与格、位格I）のいずれかでなくてはならない。

制約(24)はかなり記述的な形の制約である。制約(24)をより理論的な形で書き直すことを試みると、下に示す制約(25)に書き直すことができると筆者は考える。

- (25) zhi-の先行詞は論理主語でなくてはならない。

論理主語は次のように定義する。

- (26) 論理主語とは、節のアクタントの中で、意味役割の階層において最も高い位置にある意味役割を担っているアクタントである。

意味役割とは、動詞など主要部によって（あるいは、節によって）表される状況に対してアクタントの指示対象が持っている役割（あるいは、働き）を抽象化し、いくつかに分類した意味統語的な範疇である<sup>4</sup>。どのような意味役割を設定するべきかという問題には、いろいろと異なった提案がある。一般的には、主な意味役割として、動作主(agent)、被動者(patient)、主題(theme)、受け手(recipient)、経験者(experiencer)、道具(instrument)、着点(goal)、起点(source)、場所(location)などが設定されている。意味役割は優位性において階層をなしていると考えられている<sup>5</sup>。本稿では、基本的にBresnan and Kanerva (1989)に従った形で、次の(27)の意味役割の階層を仮定してみる。

- (27) 動作主 > 経験者、受け手 > 道具 > 被動者、主題、被経験者 > 位置、着点、起点

この意味役割の階層をもとに論理主語を考えてみると、自動詞節ではS（絶対格）が、他動詞節ではA（能格）が、斜格経験者述語節では経験者（与格、位格I）が論理主語となる。

### 3 zhi- -go

この節では、再帰代名詞zhi- -goについて考察する。zhi- -goは、前節で扱ったzhi-に接辞-goが加わった表現形式である。接辞-goは強調を表わす一般的な接辞であり、いろいろな品詞の単語に付加される。

#### 3.1

再帰代名詞zhi- -goは、(28)が示すように、再帰代名詞zhi-と同様に、異なる節にある名詞句を先行詞にすることができるとともに、(29)が示すように、再帰代名詞zhi-と違って、同一の節にある名詞句を先行詞にすることもできる。

- (28) Musa<sub>i</sub>                    zhindago<sub>i</sub>                    k'aɬalew  
 Musa · ABS      自分自身 · LOC(I)      話す · AdjPt, PRS  
 wasasukx                    balahana.  
 男の子 · LOC(II) 見る · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分自身<sub>i</sub>に話している男の子を見た。」

- (29) Musa<sub>i</sub>                    zhindirgo<sub>i</sub>      wasasukx                    balahana.  
 Musa · ABS      自分 · GEN      息子 · LOC(II)      見る · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子を見た。」

zhi- -goは、再帰代名詞として用いられる他に、(30)のように、「～自身」の意味で用いられる。

- (30) Musatsa                    zhintsago      Pat'imatie                    kumek                    habuna.  
 Musa · ERG      自身 · ERG      Patimat · DAT      手伝い · ABS      する · PST  
 「Musa自身がPatimatを手伝った。」

「～自身」の意味で用いられているzhi- -goは、zhi- -goが修飾している名詞句と同じ格で現れる。上の(30)では、zhi- -go (～自身) が能格名詞句を修飾していて、zhi- -go (～自身) も能格で現れている。zhi- -go (～自身) の語順は基本的に自由であるが、修飾する名詞句のすぐ後ろに現れることが多い。

再帰代名詞zhi- -goも、再帰代名詞zhi-と同様に、一人称、二人称の代名詞を先行詞にすることができない。一人称、二人称の代名詞に接辞-goの付いた表現形式が用いられる。(31)は、代名詞が接辞-goを伴う一人称代名詞である場合には容認されるが、代名詞が接辞-goを伴わない一人称代名詞やzhi- -goである場合には容認されない。

- (31) Dun<sub>i</sub>            dirgo<sub>i</sub>/ \*dir<sub>i</sub>/ \*zhindirgo<sub>i</sub>    wasasukx    balahana.  
私・ABS    私／私／自分・GEN            息子・LOC(II) 見る・PST  
「私<sub>i</sub>が私<sub>i</sub>／\*私<sub>i</sub>／\*自分<sub>i</sub>の息子を見た。」

「～自身」の意味でのzhi- goも一人称、二人称の代名詞を修飾することができない。代わりに(32)のように接辞-goを伴った一人称、二人称の代名詞が用いられる。

- (32) Ditsa            ditsago            Pat'imatie            kumek            habuna.  
私・ERG    自身・ERG    Patimat・DAT    手伝い・ABS    する・PST  
「私自身がPatimatを手伝った。」

### 3.2

zhi- goの先行詞が現れることができる統語的位置に関する制約は、zhi- goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合とzhi- goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合で違いがある。ここではzhi- goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合について述べる。zhi- goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合については、3.5で扱う。zhi- goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合、zhi- goの先行詞が現れることができる統語的位置に関して次のような制約があると思われる。

- (33) zhi- goの先行詞はS (絶対格)、A (能格)、O (絶対格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) と被経験者 (絶対格) のいずれかでなくてはならない。

この制約を例文を用いて示していく。先に示した(29)と(34)-(36)は、自動詞文である。(29)、(34)では、S (絶対格) がzhi- goの先行詞になっている。それに対して、(35)、(36)では、S (絶対格) 以外のアクタントがzhi- goの先行詞になっている。(29)、(34)は容認される文であるが、(35)、(36)は容認されない文である。

- (34) Musa<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>            wasasde            wayana.  
Musa・ABS    自分・GEN    息子・ALL(I)    叱る・PST  
「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子を叱った。」

- (35) \*Musade<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>            emen            wayana.  
Musa・ALL(I)    自分・GEN    父・ABS    叱る・PST  
「\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の父が叱った。」

- (36) \*Musakxe<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    hudul      wach'ana.  
 Musa · ALL(II) 自分 · GEN 友達 · ABS 来る · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>の所に自分<sub>i</sub>の友達<sub>i</sub>が来た。」

下の(37)-(42)は、全て他動詞文である。(37)、(38)では、A (能格) がzhi- goの先行詞になっている。(39)、(40)では、O (絶対格) がzhi- goの先行詞になっている。(41)、(42)では、A (能格)、O (絶対格) 以外のアクタントがzhi- goの先行詞になっている。(37)、(38)と(39)、(40)は容認される文であるが、(41)、(42)は容認されない文である。

- (37) Musatsa<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    wats      gukkana.  
 Musa · ERG 自分 · GEN 兄 (弟) · ABS だます · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の兄 (弟) をだました。」

- (38) Musatsa<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    insue      kumek      habuna.  
 Musa · ERG 自分 · GEN 父 · DAT 手伝い · ABS する · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の父を手伝った。」

- (39) Musa<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    watsas      gukkana.  
 Musa · ABS 自分 · GEN 兄 (弟) · ERG だます · PST  
 「Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の兄 (弟) がだました。」

- (40) Ditsa      Musa<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    rokx'ow      ch'wana.  
 私 · ERG Musa · ABS 自分 · GEN 家 · LOC(V) 殺す · PST  
 「私はMusa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の家で殺した。」

- (41) \*Musae<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    insutsa      kumek      habuna.  
 Musa · DAT 自分 · GEN 父 · ERG 手伝い · ABS する · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の父が手伝った。」

- (42) \*Musakxe<sub>i</sub>      zhindirgo<sub>i</sub>    hudulas      kayat      kxwana.  
 Musa · ALL(II) 自分 · GEN 友達 · ERG 手紙 · ABS 書く · PST  
 「\*Musa<sub>i</sub>に自分<sub>i</sub>の友達<sub>i</sub>が手紙を書いた。」

次の(43)、(44)は、与格経験者述語文である。(43)では、経験者 (与格) がzhi- goの先行詞になっている。(44)では、被経験者 (絶対格) がzhi- goの先行詞に

なっている。(43)と(44)はともに容認される文である。

(43) Musae<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>    was            wotɬ'ula.  
Musa · DAT    自分 · GEN    息子 · ABS    好いている · PRS  
「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子を好いている。」

(44) Musa<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>    insue        wotɬ'ula.  
Musa · ABS    自分 · GEN    父 · DAT    好いている · PRS  
「Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の父が好いている。」

下の(45)、(46)は、位格I経験者述語文である。(45)では、経験者(位格I)が zhi- goの先行詞になっている。(46)では、被経験者(絶対格)が zhi- goの先行詞になっている。(45)と(46)はともに容認される文である。

(45) Musada<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>    was            wiçana.  
Musa · LOC(I)    自分 · GEN    息子 · ABS    見る · PST  
「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子を見た。／Musa<sub>i</sub>に自分<sub>i</sub>の息子が見えた。」

(46) Musa<sub>i</sub>            zhindirgo<sub>i</sub>    wasasda      wiçana.  
Musa · ABS    自分 · GEN    息子 · LOC(I)    見る · PST  
「Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の息子が見た。／Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の息子に見えた。」

以上、(29)と(34)-(46)を用いて、zhi- goとその先行詞が同一の節にある場合、zhi- goには(33)=(47)の制約があることを示した。

(47) zhi- goの先行詞はS(絶対格)、A(能格)、O(絶対格)、斜格経験者述語の経験者(与格、位格I)と被経験者(絶対格)のいずれかでなくてはならない。

制約(47)はかなり記述的な形の制約である。制約(47)をより理論的な形で書き直すことを試みると、下に示す制約(48)に書き直すことができると筆者は考える。

(48) zhi- goの先行詞は、文法主語か論理主語でなくてはならない。

論理主語についてはすでに述べているので、ここでは、文法主語について説明する。文法主語は、文法関係という範疇の構成要素である。文法関係とは、基本的に格などの形態的表示と結びついている形態統語的な範疇である。文法関係は、主要な文法関係と二次的な文法関係に分けられる。主要な文法関係は文法主語と文法主語以外の主要な文法関係(非文法主語と呼ぶことにする)に

下位区分される。筆者は、アバール語に関して、自動詞節のS（絶対格）、他動詞節のO（絶対格）、斜格経験者述語節の被経験者（絶対格）を文法主語、他動詞節のA（能格）を非文法主語、斜格経験者（与格、位格I）を含むそれ以外のアクタントを二次的な文法関係と考える<sup>67</sup>。

S（絶対格）、A（能格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）が論理主語であり、S（絶対格）、O（絶対格）、斜格経験者述語節の被経験者（絶対格）が文法主語であるから、論理主語という概念と文法主語という概念を用いて制約(47)を書き直すと上に示したように制約(48)になる。

### 3.3

(33)に示したように、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）はともにzhi-goの先行詞になることができる。また、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）はともにzhi-goの先行詞になることができる。ここで、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）の一方がzhi-goで、他方がその先行詞になっている文について考える。

下の(49a)では、A（能格）がO（絶対格）の位置にあるzhi-goの先行詞になっている。(49b)では、反対に、O（絶対格）がA（能格）の位置にあるzhi-goの先行詞になっている。(49a)は完全に容認される文である。それに対して、(49b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとぎこちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

(49) a. Musatsa<sub>i</sub>      zhiwgo<sub>i</sub>      ʔukx'ana.  
Musa · ERG   自分 · ABS   傷つける · PST  
「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>を傷つけた。」

b. ?/\*Musa<sub>i</sub>      zhintsago<sub>i</sub>      ʔukx'ana.  
Musa · ABS   自分 · ERG   傷つける · PST  
「?/\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>が傷つけた。」

次の(50a)では、zhi-goが被経験者（絶対格）の位置にあり、経験者（与格）がzhi-goの先行詞になっている。(50b)では、反対に、zhi-goが経験者（与格）の位置にあり、被経験者（絶対格）がzhi-goの先行詞になっている。(50a)は完全に容認される文である。それに対して、(50b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとぎこちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

(50) a. Musae<sub>i</sub>            zhiwgo<sub>i</sub>        wotl'ula.  
 Musa · DAT 自分 · ABS 好いている · PRT  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>を好いている。」

b. ?/\*Musa<sub>i</sub>            zhindiego<sub>i</sub>    wotl'ula.  
 Musa · ABS 自分 · DAT 好いている · PRT  
 「?/\*Musa<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>が好いている。」

下の(51a)では、zhi- goが被経験者（絶対格）の位置にあり、経験者（位格I）がzhi- goの先行詞になっている。(51b)では、反対に、zhi- goが経験者（位格I）の位置にあり、被経験者（絶対格）がzhi- goの先行詞になっている。(51a)は完全に容認される文である。それに対して、(51b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとごちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

(51) a. Musada<sub>i</sub>            zhiwgo<sub>i</sub>        ch'alfana.  
 Musa · LOC(I) 自分 · ABS 飽きる · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>に飽きた。」

b. ?/\*Musa<sub>i</sub>            zhindago<sub>i</sub>     ch'alfana.  
 Musa · ABS 自分 · LOC(I) 飽きる · PST  
 「?/\*Musa<sub>i</sub>に自分<sub>i</sub>が飽きた。」

### 3.4

再帰代名詞としてのzhi- goの先行詞を「～自身」の意味でのzhi- goが修飾している文について論じる。(52)のような文である。

(52) Musatsa<sub>i</sub>            zhintsago    zhindago<sub>i</sub>    hedin        abuna.  
 Musa · ERG 自身 · ERG 自分 · LOC(I) そのように言う · PST  
 「Musa<sub>i</sub>自身が自分<sub>i</sub>にそのように言った。」

この場合、「～自身」の意味でのzhi- goは再帰代名詞としてのzhi- goの直前に現れるのが一般的である。ここでも、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）の一方がzhi- goで、他方がその先行詞になっている文について考える。

下の(53a)では、A（能格）がO（絶対格）の位置にあるzhi- goの先行詞になっている。(53b)では、反対に、O（絶対格）がA（能格）の位置にあるzhi- go

の先行詞になっている。(53a)と(53b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(53b)の方である。

(53) a. Musatsa<sub>i</sub>      zhintsago      zhiwgo<sub>i</sub>      łukx'ana.  
Musa · ERG   自身 · ERG   自分 · ABS   傷つける · PST  
「Musa<sub>i</sub>自身が自分<sub>i</sub>を傷つけた。」

b. Musa<sub>i</sub>              zhiwgo              zhintsago<sub>i</sub>      łukx'ana.  
Musa · ABS   自身 · ABS   自分 · ERG   傷つける · PST  
「Musa<sub>i</sub>自身を自分<sub>i</sub>が傷つけた。」

次の(54a)では、経験者(与格)が被経験者(絶対格)の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(54b)では、反対に、被経験者(絶対格)が経験者(与格)の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(54a)と(54b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(54b)の方である。

(54) a. Musae<sub>i</sub>              zhindiego      zhiwgo<sub>i</sub>      wott'ula.  
Musa · DAT   自身 · DAT   自分 · ABS   好いている · PRS  
「Musa<sub>i</sub>自身が自分<sub>i</sub>を好いている。」

b. Musa<sub>i</sub>              zhiwgo              zhindiego<sub>i</sub>      wott'ula.  
Musa · ABS   自身 · ABS   自分 · DAT   好いている · PRS  
「Musa<sub>i</sub>自身を自分<sub>i</sub>が好いている。」

下の(55a)では、経験者(位格I)が被経験者(絶対格)の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(55b)では、反対に、被経験者(絶対格)が経験者(与格)の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(55a)と(55b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(55b)の方である。

(55) a. Musada<sub>i</sub>              zhindago              zhiwgo<sub>i</sub>              ch'al'ana.  
Musa · LOC(I)   自身 · LOC(I)   自分 · ABS   飽きる · PST  
「Musa<sub>i</sub>自身が自分<sub>i</sub>に飽きた。」

b. Musa<sub>i</sub>              zhiwgo              zhindago<sub>i</sub>              ch'al'ana.  
Musa · ABS   自身 · ABS   自分 · LOC(I)   飽きる · PST  
「Musa<sub>i</sub>自身に自分<sub>i</sub>が飽きた。」

## 3.5

ここまでは、zhi-*go*の先行詞がzhi-*go*と同一の節にある場合について論じたが、ここでは、zhi-*go*が異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合について述べる。zhi-*go*が異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合、zhi-*go*の先行詞が現れることができる統語的位置には、基本的に制限がない。zhi-*go*の先行詞はいろいろな統語的位置に現れることができる。

(56)ではS(絶対格)がzhi-*go*の先行詞になっていて、(57)ではA(能格)がzhi-*go*の先行詞になっている。また、(58)では他動詞節の与格名詞句がzhi-*go*の先行詞になっている。

(56) Musa<sub>i</sub>                zhindago<sub>i</sub>                k'atālew  
 Musa · ABS    自分自身 · LOC(I)    話す · AdjPt,PRS  
 wasasukx                balahana.  
 男の子 · LOC(II)    見る · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が自分自身<sub>i</sub>に話している男の子を見た。」

(57) Musatsa<sub>i</sub>                zhindiego<sub>i</sub>                tɬ'ural  
 Musa · ERG    自分自身 · DAT    与える · AdjPt,PST  
 sualaze                zhawab                tɬ'una.  
 質問 · PL,DAT    答え · ABS    与える · PST  
 「Musa<sub>i</sub>が(誰かが)自分自身<sub>i</sub>に与えた質問に答えた。」

(58) Musae<sub>i</sub>                zhindago<sub>i</sub>                ɬalarew  
 Musa · DAT    自分自身 · LOC(I)    知っている · AdjPt,PRS,NEG  
 chijas    ɬarats                tɬuna.  
 人 · ERG    お金 · ABS    与える · PST  
 「Musa<sub>i</sub>に自分自身<sub>i</sub>が知らない人がお金を与えた。」

(56)、(57)のzhi-*go*は再帰代名詞のzhi-*go*かもしれないが、(58)のzhi-*go*は、代名詞ではなく、「～自身」の意味で代名詞を修飾している要素であり、代名詞自身は省略されている(生成文法でのゼロ代名詞である)と、筆者は考えている。

参考に述べると、次に示すように、再帰代名詞zhi-は「～自身」の意味でのzhi-*go*で修飾することができないが、指示代名詞he-(その人、それ)は「～自身」の意味でのzhi-*go*で修飾することができる。

- (59) Musa<sub>i</sub>                      \*zhinda<sub>i</sub> zhindago/ hesda<sub>i</sub> zhindago  
 Musa・ABS                      自分 自身／その人 自身・LOC(I)  
 k'atālew                      wasasukx                      balahana.  
 話す・AdjPt,PRS 男の子・LOC(II) 見る・PST  
 「Musa<sub>i</sub>が\*自分<sub>i</sub>自身／その人<sub>i</sub>自身に話している男の子を見た。」

#### 4 終わりに

本稿では、アバール語の再帰代名詞zhi-、zhi- -goの分布を考察した。まとめると次のようになる。第一に、zhi-とzhi- -goは、一人称、二人称の代名詞を先行詞に取れない。次に、zhi-、zhi- -goの先行詞が現われることができる統語的

(60)

	同一の節		異なる節	
	zhi-	zhi- -go	zhi-	zhi- -go
S (絶対格)	NO	OK	OK	OK
A (能格)	NO	OK	OK	OK
O (絶対格)	NO	OK	NO	OK
与格・位格I経験者	NO	OK	OK	OK
主格被経験者	NO	OK	NO	OK
その他	NO	OK	NO	OK

位置は次の表にまとめることができる。

本稿では、zhi-とその先行詞が異なる節にある場合にzhi-の先行詞になることができる名詞句、すなわちS (絶対格)、A (能格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) を論理主語として理論的に一般化した。そして、zhi- -goとその先行詞が同一の節にある場合にzhi- -goの先行詞になることができる名詞句、すなわちS (絶対格)、A (能格)、O (絶対格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) と被経験者 (絶対格) を論理主語か文法主語であると理論的に一般化した。

## 注

\* 本稿は日本言語学会第117回大会で発表した内容（山田1998c）の一部に加筆と修正を施したものである。安井泉先生に草稿に対して貴重なご助言をいただいた。ここにお礼を申し上げたい。アバール語は、北東コーカサス諸語（ダゲスタン諸語）の一言語で、主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されている。アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、本稿ではラテン文字へ次のような転写を行って、アバール語を表記している。а: a, б: b, в: w, г: g, гь: y, гь: h, гI: ŋ, д: d, е: e, ж: zh, з: z, и: i, й: j, к: k, къ: kx', къ: tɬ', кI: k', л: l, ль: ɬ, м: m, н: n, о: o, п: p, р: r, с: s, т: t, тI: t', у: u, ф: f, х: x, хь: kx, хь: ɟ, хI: h̃, ц: ts, ч: ch, ш: sh, ш: shch, э: e, ю: ju, я: ja。本稿のデータは1996年8月から1998年2月の間と1998年の8月にロシア連邦ダゲスタン共和国で行った調査による。S.D.S.氏、X.M.D.氏、I.I.M.氏を中心に多くの方にアバール語のインフォーマントになっていただいた。ここで感謝の意を申し上げたい。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL:奪格、ABS:絶対格、Adj:形容詞、AdjPt:形容詞的分詞、ALL:向格、DAT:与格、ERG:能格、GEN:属格、LOC:位格、NEG:否定、PL:複数、PRS:現在、PST:過去。アバール語の位格、向格、奪格は5系列の構成要素からなる。系列I、II、III、IV、Vの基本的な意味は、それぞれ、「～の上」、「～の辺り、～の所」、「～（連続的な媒体など）の中」、「～の下」、「～（入れ物など）の中」である。アバール語の全体像に関しては、Uslar (1889)、Bokarev (1949)、Madieva (1980)を参照していただきたい。

1. Sは自動詞の唯一の主要な項である。AとOは他動詞の二つの主要な項で、Aは典型的な他動詞で動作主(Agent)が現われる項であり、Oは典型的な他動詞で被動者(Patient)が現われる項である。
2. zhi-の先行詞を直接的に支配している文がzhi-を間接的に支配していれば、間接の度合は問題にならない。
3. 本稿では、項(argument)と付加語(adjunct)の総称としてアクタント(actant)という用語を用いる。
4. 意味役割やそれに類する概念については、Fillmore (1968)、Jackendoff (1972, 1990)、Andrews (1985)とそこであげられている文献を参照していただきたい。

5. 代表的な例をあげると、Jackendoff (1972)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent>Location, Source, Goal> Theme。また、Foley and Van Valin (1984)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent> ..> Effector> ..> Locative > ..> Theme > ..> Patient。そして、Bresnan and Kanerva (1989)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent> Beneficiary > Recipient/Experiencer > Instrument > Theme/Patient > Location。
6. このように仮定することを支持する統語現象がいくつかある。その一つが相互代名詞tsotsa-の分布である。相互代名詞tsotsa-の分布を簡単にまとめるが、詳しくは山田(1998a, 1998b)を参照していただきたい。

S (絶対格) の位置にある名詞句がその他の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、S (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がその他の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。O (絶対格) の位置にある名詞句がA (能格) およびその他の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、O (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がA (能格) およびその他の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。A (能格) の位置にある名詞句がO (絶対格) 以外の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対にA (能格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がO (絶対格) 以外の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。斜格経験者述語節では、被経験者 (絶対格) の位置にある名詞句が経験者 (与格、位格I) の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、被経験者 (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-が経験者 (与格、位格I) の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。

自動詞節のS (絶対格)、他動詞節のO (絶対格)、斜格経験者述語節の被経験者 (絶対格) を文法主語、他動詞節のA (能格) を非文法主語、斜格経験者述語節の斜格経験者 (与格、位格I) を含むそれ以外のアクタントを二次的な文法関係と仮定して、次に示す文法関係の階層(i)に基づいた制約(ii)を用いると、上に示した事実がきれいな形で説明できる。

(i) 主要な文法関係 (文法主語>非文法主語) >二次的な文法関係

(ii) 文法関係の階層で先行詞が相互代名詞tsotsa-より低い位置にあってはならない。

7. Dixon (1979, 1994)、Marantz (1984)、Manning (1996)などでは、Dyirbal語やエスキモー語などで自動詞節のS（絶対格）、他動詞節のO（絶対格）が文法主語であると考えている。

### 参考文献

- Andrews, Avery. D. (1985) "The Major Functions of the Noun Phrase," in Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 1: Clause Structure*. 62-154. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis Avarskogo Jazyka*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Bresnan, Joan and Jonni M. Kanerva (1989) "Locative Inversion in Chichewa: A Case Study of Factorization in Grammar," *Linguistic Inquiry*, 20: 1-50.
- Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language*, 55: 59-138.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles (1968) "The Case for Case," in Emmon Bach and Robert Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-90. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija Avarskogo Literaturnogo Jazyka*. Maxachkala: Dagchpedgiz.
- Manning, Christopher D. (1996) *Ergativity: Argument Structure and Grammatical Relations*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Marantz, Alec. P. (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Uslar, P. K. (1889) *Etnografija Kavkaza. Jazykoznanie. III. Avarskij Jazyk*. Tiflis.
- 山田久就 (1998a) 「アバール語の相互代名詞 tsotsa-について」『日本語学会第116回大会予稿集』130-135.
- 山田久就 (1998b) 「アバール語の相互代名詞 tsotsa-」『一般言語学論叢』第1号. 94-108.

山田久就 (1998c) 「アバール語の再帰代名詞」『日本言語学会第117回大会予稿集』 198-203.